

## 母の日記

——今からでも遅くはない——

お母さん方は、お子さんの爲に日記をつけてあげておいで、すか。誕生以來つづいてゐる日記の、どんなに貴いことであらう。しかし、そうでなくとも、どんな機会をきつかけにして書き始められたものでも楽しいことです。「我子の幼稚園日記。」「太郎の夏休み日記。」「花子の歸郷日記。」それだつていいですね。それは、後になつて思ひ出になるばかりでなく、今の我子の生活を、一日々々粗末に通り過ぎさないことにもなります。

學校にあがるやうになつたら、子どもは自分で日記をつけるでせう。幼稚園では、字も書けないし、毎日といふこともまだまだとまっています。そこは、お母さんの日課として、繪はお子さんに描いて貰ひませう、唯、こんな途中からなんて思ふと、いつになつても始まりません。「今からでも遅くはない」ですよ。



昭和十五年

八月

## 日やけ潮やけ

「僕の方が黒いよ」

「わたしだつて眞黒よ。手だつてこんなに」

夏の健康を自慢しあふ子ども達の顔の元氣さ。

「山へ登つたのよ」

「波のりが出来るよ」

脚を踏み、腕を振つて見せあふ子ども等の頼もしさ。

かうして、男の子も女の子も、九月の幼稚園を黒光りに光らせ、賑かに盛りあがらせる。九月の子ども達こそ、夏の、夏を一ぱいに注意したお母さん方の傑作

展覽會です。

いつまでも、子どもの顔を此の黒光りに置きたいと思はずにはゐられないのが、九月の幼稚園の希望ですが、九月のお母さん方の御希望でもありません。折角の傑作の日やけ潮やけを、はげさせないやうに。うすばんやりとさせないやうにと。——それには、この美術品を座敷の中にばかり仕舞ひ込んで置かないことです。安繪具で塗つたんちやないですもの、外へ出したつて變色なんかしませんよ。日光にあてれば益々、光澤が出るばかりです。

(倉橋惣三)